

# 佑啓

ゆ う け い

発 行 者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

## 桜島、静かなり

～鹿児島紀行（其の一）～

里見 吉英

冷たい雨の降る一月、羽田空港へ向かう。日頃、日本知的障害者福祉協会の政策委員会において障害者自立支援法について厚労省や議員と折衝や検討をしているが、同じ委員として参画している鹿児島県の施設長さんから鹿児島島の協会が開催する研修会で講演を依頼されていた。

せっかくだからと予てよりふる里学舎の里山整備において進めている果樹栽培の研究もしようとして、果樹の担当職員の郷里が鹿児島というところもあり、ガイドも兼ねて同行させた。その他黒豚と薩摩焼酎のイメージで大食いとお酒のみの二人を選んだ。風体や人数から西遊記のご一行ならぬ南遊記となった。もちろん私は三蔵法師である。誰が猪八戒で・・というのをご想像にお任せしよう。

第80号  
キント雲でも馬でもなく、飛行機に乗り二時間弱で鹿児島に到着。鹿児島Ⅱ南というイメージもあった。何を着ていくか悩んだ末に、防寒仕様で出かけたが、当地は暖かく、コートはただの荷物となってしまった。しかし実は鹿児島でも冬は寒く雪も降ることを後で知

る。運良く（悪く？）我々の滞在時は例外的に暖かかったそうである。

まずは、前出の施設長さんを訪ねて施設を見学させていただく。児童施設からスタートし、その子らの将来の受け皿として入所施設を展開、ニードや時代に合わせた個室化、そしてグループホームの整備など、常に時代や地域のニードに合わせた運営内容は素晴らしいかった。



施設はそこを利用している人のものだけであってはならない。それは施設という『点』のサービス、そこを利用している人のためだけの運営ではなく、地域の将来にわたっての『面』としての機能が求められている。その為には、経営層は将来にわたって運営を維持できる体制作りを常に描かねばならない。それは、そこに働く職員の将来の安定、イコールそこに暮らす利用者の安定した生活に通ずる。

しかし、それは利益を追求するということとは違うし、本来、社会福祉法人はそのような視点ではない。だが、現在の法の下では、残念ながらそのような考えも横行している。

株式会社などの参入も入所施設を除いては門戸が開かれているが、株式会社は当然、営利が目的であり、株主に対する責任もある。だから儲からなかったら、撤退してしまう。福祉は継続が大切であり、その為には、福祉の理論と経営の視点を持ち合わせる必要がある。そして何よりも、親亡き後も含め、一生関わっていくという覚悟、三蔵法師風に言えば「一蓮托生」という気概がなくてはならない。

開けば、鹿児島では入所施設で定員に満たない施設もあるという。首都圏では到底考えられないが、地域には地域の実情があり、やはりそのニーズを考えなくてはならない。

その為にはどのような施設にすべきか？見学した施設も、昭和三十三年の創設ながらその古さを感じさせない清潔感がある。新しいから良い施設、古いから悪いということではなく、古いからの良さがなくてはならない。また、こちらの施設では薩摩焼きの作業が素晴らしい。玄人はだしの出来栄えは、ある利用者の類まれなる才覚の賜物という。その美しさを紙面でお伝えできないのが残念だが、即座に買い求めた作品は私の部屋に飾ってあるので、お越しの際には是非見ていただきたい。やはりこれが文化だと思う。一般の土産物店にも出荷していて、今はだいぶ落ち込んでしまったそうだが、焼酎ブームなどの追い風もあり、一頃は注文の電話が来るのが怖い

くらいの忙しさだったとのこと。

また、果樹の栽培もされていて、案内していただく。きれいに手入れされた畑に行くと、一人の職員の方が作業をされていた。我々の果樹担当、ミカン山の孫悟空が質問をするので、丁寧に的確に答えてくれ、よくよく聞いたら、元は果樹の本職の方だった。色々教えていただいたが、最後の言葉が仕事の全てに対する金言である。「何よりも手間隙かけて愛情を注ぐことです。」



それにしても、すれ違う職員は我々を見るなり手を止め足を止め、笑顔で挨拶をしてくれる。接遇は職員教育の柱であり、うちの職員にも口をすっぱくして伝えていることである。果たしてうちの職員もここまで出来ているか、と大酒呑みの沙悟浄に水を向けると、心なしか顔が引きつっていたのは気のせいだと思いたい。ともあれ一朝一夕で出来ることではなく、積み重ねであり、これも文化といえる。



挨拶をはじめ、立ち居振る舞い、身なりは施設職員だからというよりも、社会人として最低限身につ

けてほしい。「福祉人である前に社会人であれ」我が法人のモットーの一つでもある。福祉だけで視界を定めてしまうと、社会の視点を忘れてしまう。挨拶もできない職員、身なりの汚い職員が、利用者に対してやれ就職だの、地域生活だのなんてとんでもない。物言わぬ利用者だから見過ごされていくだけだ。

「人の役に立ちたい」そういつて就職してくる若者が多いが、福祉施設の職員なんて特別なものではなく、世の中に役に立たない仕事なんて無いのだ。直接介護なり、介助をするから役に立つとかでは決して無い。「いいこと」がしたければボランティアでいい。仕事として金を貰って働く我々福祉の世界は税金の上に成り立っている。

であれば納税者よりも働きましょうということ。頭のいい人、体が丈夫な人、それぞれが自分の器を知り、その器でサボらずに精一杯働く。それがプロフェッショナルである。



夜になり、先ほどの施設長さんご夫婦と杯を交わすお時間を頂く。郷土料理に焼酎とあつては大好きな猪八戒と沙悟浄の出番である。さつまあげ、きびなごなどの名産品を美味しくいただきながら、ご当地ならではの話も伺う。鹿児島といえは雄大な桜島。噴火の回数は年間六〇〇回もあると聞き驚く。我々は噴火という、天災、そう九州でいえば普賢岳や新燃岳のような災害を思い起こしてしまう。そしてそれは、先の大震災ともオーバーラップしてしまう

ほどのイメージがあるが、当地の方々の生活は桜島の噴火と密接である。洗濯物干し、洗車の直後に噴火して灰をかぶった「ツいてないなあ」くらいの雨に近い感覚だという（当然、危険な噴火もあるのだ）。「そこに住もうという覚悟、そして郷土愛があればこそ言葉だと思ふ。」

「ぼっけもん」この地の人々の気質を表す言葉。挑戦心がある、向こう見ず、ウジウジしい、肝玉が太い、などなど。土地と人に触れ、得心する。

今日は噴煙を見ることはなかったが、二泊三日の滞在であればお目にかかる機会も充分ありそう。

明日は、旅の主目的である講演が控えているので、深酒はせずにベッドに潜ろうとしたが、ダメであった。

目覚めて窓の外を見ると、昨日と変わらない桜島が見えた。

【つづく】  
(理事長)



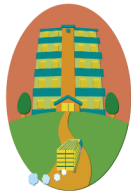


もう一つの話として、昨年十二月にふる里学舎の各事業所で忘年会が開かれた。その中のふる里学舎和田浦の忘年会に参加した時の話をしたいと思う。参加する前に色々な先輩職員に「どういう風にしていけば、いいですか?」と聞くも、様に『一年目で和田浦の忘年会に参加するのはお前が初めてじゃないか』と、不安にさせ



ふる里学舎に初めてお世話になったのは春彦が養護学校の高等部三年生の実習でした。

我家からはやや遠かったのですが、それ以前にふる里学舎を見学させて頂いて充実した設備や職員方の姿を拝見したので、実習の時はお願いしよ



こう」と言うので約束の見学日より前から何度もドライブで現地を見に行ったりしていました  
が、いざ見学させて頂くと本人も「ホテルみたい」と言っていると



それ以来電話はあまりしないようにしています。自宅へ帰る金曜日は、部屋の掃除をしてから帰るということを決めていましたところ。今日は寒いから早く

河田 理紗子